

覚えない意欲におとなは手助けを

漢字の場合、四歳ごろの子どもは、ひとたびこれに関心をもってながめると、ただそれだけで覚えてしまいます。

わたしは、幼稚園をまわって、園児たちによくお話をしますが、話しながら、その話の中に出てくる言葉を、さりげなく黒板に書きつけていきます。たとえば、山・川・柿・実というようにです。

すると子供たちは、「おや、何を書いたんだらう」という顔つきでそれをながめます。「何だらう」と、つぶやく声も聞えます。しかし、わたしはそしらぬ顔で話を続けます。

話の中に、もう一度“柿”が出てきた時、「柿が……」と言いながら、黒板の柿という字を指さします。すると、「あれ柿という字か」とつぶやく声が聞こえます。つぶやかなくても、多くの子どもたちは、柿という字を目に焼きつけてしまうのです。

やがて話が終わって、黒板の漢字を読ませてみますと、十字から二十字くらいの漢字だったら、たいていまちがいをなく読めるようになっています。それらの漢字を次の日読ませてみますと、80 パーセントくらいの子どもが、ちゃんと読むそうです。

こうして、一度子どもたちに書いて見せた漢字は、その後たびたび

書いて見せることによって、その記憶を保持し、一生忘れないものにしてやることができます。

この際大事なことは、話に先立って、「漢字を書きますよ」とか「漢字を教えてあげます」とか言わないことです。

話を聞くことに一心になって、幼児の目が話し手に集中しているなら、さりげなく書かれた漢字にも必ずひきつけられて見つめるに違いない、そうすれば、幼児はその漢字の形を頭に刻み込まずにはおきません。

ですから、無論、黒板に書いた山や川などの漢字を「覚えなさい」と言う必要はありません。ことに、四歳を過ぎた幼児には、“教え込もう”という態度をもつと、かえって“やる気”をおさえることになり、そっぽを向かせてしまうことになりがちです。「漢字を覚えようと覚えまいと、そんなことは問題ではない」という気持でやった時に、かえってよく覚えてくれるものです。ところで、三歳ごろまでは、何でも素直に受け入れていたものが、四歳ごろになると、“やる気”を出して、自分なりの考えで物事を取り入れるようになります。つまり、“やる気”を育て、“やる気”に訴えるようにしなければいけません。それにはどうすればいいでしょうか。